會員通信

ネパールの山旅から

有馬　純

北大退官後間もなく、私は厳冬期ダウラギリⅠ峰（八一六七ｍ）の初登頂を目指す北大遠征隊に加わることになった。総勢一五名、この中登攀に当る本隊は一三名で、私は総隊長ということで若い隊員を伴って、二週間ほど本隊のルート沿いに山の中を歩くことになった。

本隊は十月初めに既にポカラを発ってキャラバンを開始し、十二月初めには氷河を登って標高五九〇〇ｍ附近のコル（肩）にベースキャンプを作り終わり、いよいよ登頂にかかる頃、私達は札幌を発ったのである。私達は本隊が登頂して下山する途中で一行を迎える計画であった。

ネパールの首都カトマンズ、その表玄関である国際空港に着いた時は夕刻も可成り遅い時刻であった。税関検査で列を作って並んでいる中に便意をもよおした私は、やっと手続きを終えて大急ぎでトイレを探し馳け込んだがライトがつかないのである。仕様がないので入る前にドアを開いて便器の在りかを見定めて中に入り、ドアを閉めて、それと覚しき場所に放尿した。入国早々のこの出来ごとは、ネパールという国の衛生施設のみならず、官庁や交通事情の実態を物語るように思える。私どもは日本人の経営する安宿に落着き数日を登山の準備に費したのであった。

私はカトマンズからポカラ迄は家内を同行した。幸い彼女の帰国迄同行してくれる山好きのＫ氏と山岳部の若いＯＢでドクターのＡ夫妻が一緒であった。カトマンズからポカラ迄は立派なバス道路が深い山々の中をうねうねと続いている。約八時間、印度製の古めかしいバスに揺られ、午後三時頃ポカラに着く。ネパール西部の名邑ともいうべき街で、北方に白銀の秀麗な姿をみせているマチャプチャリ（七〇〇〇ｍ）はアルプスのマッターホルンにもまさる美しさである。思わず息を呑んで眺め入り、次で一斉に皆感嘆の声を挙げる。私達の宿はネパール王の別荘の近く、美しいペワ湖の対岸にあり、筏に乗って渡るのであった。翌日も快晴、早朝この湖畔から朝焼に映えるマチャプチャリの眺めは、ことに湖にその倒置した影を写して美しい。ポカラはこの季節連日の晴天で、日中は汗ばむほどの暖かさであった。

家内達と別れ、いよいよポカラ郊外からキャラバンである。サーブ（旦那の意）四名にシェルパ六名、最年長は二十五歳のサーダー（人夫頭）、最年少は十八歳のスンバ。何れも三十キロに近い荷を軽々と背負って歩く。私達のキャラバンルートは恐らく大昔から開かれているチベットとネパールを結ぶ街道なのだろう。道こそ緩急の度合が厳しいが、その大部分は大理石を含む硬質の岩石で敷きつめられており実に堅牢なものであった。私達は朝八時から夕刻四時頃迄毎日歩いたが、一時間位の行程で次々と部落があり、その度に茶（紅茶）を安く飲むことができた。夜はテントを用いずすべてローカルハウスに泊った。心配した蚤、虱や南京虫に少しも悩まされることなく、又生水を厳重に避けた為か下痢をすることもなかった。四日目に泊ったゴラパニ峠からの朝の眺めはまさに天下一であった。ダウラギリ、アンナプルナが実に立派であった。

ゴラパニ峠から一日でカリガンダキの大渓谷に出るとタトパニ、ここでＡ夫妻と別れ、下流へと道を急ぐ。本隊は既に下山の途中にあり、マヤンディコーラを下っているに違いないと思うと心せわしい。カリガンダキの上流を振り向けば、真青な空、深い谷の上に高峰ニルギルが美しい山肌を見せている。その夕刻まさに薄暮のベニの部落で私達は登頂を果して下山中の安間君（隊長）、登頂者の小泉君と道新特派員先川君に会い、感激の握手をすることができたのであった。あの日の歓びは生涯忘れ得ないであろう。四十台半ばの安間隊長の顔には二ヶ月に亘る激しく辛かったであろう登山活動を反映してか年に似合わぬ深い皺が目立って感ぜられた。

（北星学園大学学長）

信州のモイワナズナに思う

塩野入　忠雄

「ホレ見ろ。これがモイワナズナだ」

半世紀近くも昔のこと、信州上田の千曲川左岸の「岩鼻」とよぶ大断崖を見上げながら、その岩壁の割れ目にしがみついて咲く真白いその花を指さし示してくれた「ご師匠さん」の八木貞助先生のこの声が、今も私の脳裏に残る。先生はその頃、長野県飯田高等女学校（現飯田風越高等学校）の校長先生であり、言うまでもなく地質学の

権威者であり、この上なく信州の自然を愛された先生であった。

「ホレ見ろ」これは地質の野外指導の度ごとに私たちに呼びかける先生の口癖であった。その「ホレ見ろ」には、私たち「弟子ども」への限りない愛情がこもり、また先生自身の大自然への限りない愛着と感動がにじんでいた。この時もその「ホレ見ろ」であった。そのモイワナズナが、この岩鼻に毎年の春ごとに真白い花を咲かせて、私の心をとらえ、さらに北海道の自然への思いをかきたてる。

モイワナズナは、北海道の藻岩山で発見されてその名のあるアブラナ科の植物で、その北海道と信州のこの岩鼻にだけ自生する遺存寒地植物であることを、その時に初めて知った。その遺存寒地植物の故をもって、一九二四年に長野県天然記念物(旧法)として報告された。それが新しく文化財保護法が制定されてから、改めて一九七〇年に「モイワナズナ自生地の岩鼻」として長野県文化財(天然記念物)に指定されて今日にいたっている。半世紀前にこの岩壁のこの白い花を見上げながら、「ホレ見ろ」と言われた八木貞助先生の頭の中には、遠く離れた(当時は遠かった)北海道の藻岩山を偲んだことであろう。奇しき縁(えにし)というのであろうか、先生の学問を嗣がれ、当時まだ学生であったご子息の八木健三先生が、今はその札幌市の藻岩山麓にお住いである。「貞助先生はしあわせ者ですね」と私は心の中で亡き先生に呼びかけるとともに、親子二代のこの両先生にご指導頂いた私自身の幸福を思うのである。いや私ばかりでなく、信州にはそのような人たちが多いのだ。

モイワナズナは遺存寒地植物として、北海道の外になぜこの信州の岩鼻にだけ自生するのであろうか。信州でも高山地帯ならばともかく、この上田盆地は海抜約四〇〇メートルの、しかも信州では最も温暖の盆地である。岩鼻はその北隅にある。私はこのことを長年考えているが、今もってその答えは分らない。ただここは上田盆地から長野盆地へ抜ける千曲川貫通谷(坂城広谷・本間不二男)の横谷性の広谷の南の咽喉部である。両岸に比高八〇メートルほどのほとんど垂直の絶壁の両「岩鼻」が相対して、千曲川がその間を浸食している。上田・長野両盆地を吹き抜ける季節風は、ここで集束風となって風速も強まり、両岸の岩壁をことに乾燥させもする。この集束風が岩壁をこすり抜けるときの岩壁から蒸発熱を奪うその現象で、岩壁の温度を異常に低下させるのではなかろうか、とも考えてみた。しかしその右岸の岩鼻にはモイワナズナは自生しない。県の文化財調査報告書には右岸にもとあるが、私の調査ではそれは確認できない。あるいはこの気象現象とは別に地質現象によるものかとも考えてみた。モイワナズナの左岸の岩鼻は石英角閃石玢岩であり、右岸の岩鼻は第三紀層の内村層のグリーンタフ(多分に火山岩質)である。私は移植実験なども試みてみたが、まだ解答は出ない。ここのモイワナズナの開花期は北海道より大分早く四月上・中旬(県の文化財調査報告書には五〜六月頃とあるが間違いである)であるが、今も私は必ずそれを見にゆき、その安否を確かめ、北海道を偲ぶのである。

また最近はカブタチナズナ(大井次三郎)とはどう違うのかの真偽も考えている。なお上田市の郊外には「信州の北海道」ともある人たちに懐しがられる菅平高原があり、四阿火山の大裾野をつくっている。ここにも今の日本では北海道とこの菅平だけ、といわれる植物が自生する。すなわちカラフトイバラ・エゾサンザシなどである。しかしここは海抜も一〇〇〇〜二〇〇〇メートルの高原であるのでこれらの遺存寒地植物の分布は不思議ではない。

ともあれ北海道に似た自然環境の中で咲く淡紅色のカラフトイバラは、岩鼻の真白いモイワナズナとともに北海道の自然へのあこがれをかきたてる花である。

(長野県文化財保護協会)

——折角塩野入さんがモイワナズナに北海道を思って下さったのに、残念ながら本家の藻岩山ではモイワナズナはたいへん稀なものになってしまった。なお札幌の西南郊外の八剣山にも幸いにしてまだ細々と残っている。(八木記)

あるきっかけからの「自然」偶想

吉田　兎四郎

先日孫娘が学校の修学旅行で、上高地を訪れた。最近の大正池は土砂の流入で、段々と埋められて来て、あの特異な景観が日に日に失われるのが問題となって来ている。そこでこれを保つために、大がかりな砂防計画が検討されているとのことであった。そこで学校から各生徒に問題が提起された。

「この砂防工事につき如何に思うか、感想を述べよ」というのである。孫は、何やら怪しげな問題と思ったらしく、祖父の私に、如何に考えるかと転問して来た。

大正池といえば先ず思い出されるのが、五十年も昔、原節子がデビューした頃の映画「新しき土」の一場面である。筋は忘れたが、小杉勇が着衣のままであの池でクロ

ールで泳ぐ場面である。あの頃は馬鹿馬鹿しいカットを撮ったものだと苦笑した記憶があるが、今頃それを思い出すということはやはりあの特異な風景が脳裏に焼付いていた為であろう。とすれば、ファンク監督の感覚は馬鹿にしたものではなかったのかな、などと妙な感想に陥ってしまったが、これでは答にはならない。

改めて考えて見れば、梓川の流れを、焼岳の噴火で堰きとめて、大正池を作ったのは、非常に短時間に起った自然現象であり、これが土砂で埋まるのは、比較的長い時間の現象である。これに人間が介入して、土砂止めを行おうとするのは、いらぬおせっかいというものではなかろうか。しかもどうせ完全な土砂止めなど出来る訳はないのだから、若干埋没の時間を遅らせる程度の、自己満足の効果しかないのではあるまいか。そして世間にはこのような事態は数えればきりのない程あるのではなかろうか。

我々が「自然」ということを考えるとき、人工と対比して取上げることが多いが、これも妙な話で、人間などいくら威張って見ても、時間的にも、空間的にも、大自然の中のほんの一部分にしかすぎない存在であろう。また人工とか、自然の破壊とか、改良とか思っていることも結局自然の種々な変革の中の小さな現象にすぎないのではあるまいか。

際限なく巨大化した恐龍がその巨大化したが為に絶滅の道を辿ったように、己が知識に酔い、己が発展にのみ血道をあげている人類が、その叡智を以て際限なく地球を変貌させ、海を汚し、森を失い、砂漠を広げ、化石燃料を消費し盡し、酸素のバランスを失い、地表温度の変革を来し、やがてその生活基盤を回復出来ないで絶滅して行くのも、悲しい哉やはり一つの自然現象と考えてよいのであろうか。

所詮善というも悪というも、その判断の基準は一つの仮定であり、我々現在に生きる人類の仮定は、人類の安定した存在を少しでも長く保つ為ということであろうか。

この仮定に立って、なるべく多くの欲望を満たすために、事の善悪、重点の順位を定めて行けば、冒頭の砂防工事などは労と功とをはかりにかけて、やらねばならぬ部類には入らぬであろう。最近富士山山頂附近の崩壊を防止するするために、大規模な改修土木工事の必要性が一部の人びとによって力説されているが、これなども大正池の砂防工事と同じ部類の問題である。それにもかかわらず、そうはっきりと否定してしまうのも憚られる処が人間世界の微妙な点であろう。

老拙の妄想をつぎの偶感にまとめてみた。御容赦いただきたい。

偶感

瞬變熔岩塞　一瞬熔岩渓を堰き
流砂営永年　土砂は永年流入る
獣禽千態賑　自然の禽獣数知れず
草樹萬花鮮　草木も祝ぎてあでやかに
輪奐容衰朽　大建造物もすぐ壊れ
廃荒難復還　荒れた自然は還らない。
化工常順応　天の営み無理はなく
不許漫誇賢　人の智恵などしれたもの

（石井鉄工所名誉顧問）

自然保護といけ花

南　秀月

最近、自然環境保全が世界中で、その声が高まっています。

科学、技術の発達は目ざましいものがありますが、私達の生活はその渦にまき込まれています。

なんの抵抗もなく安閑と物質文明にのみ支配される人間が多いようで、自身の首をしめていることに気付かないのが残念でなりません。もっと以前に自然が破壊されないように一考することが、人類に課せられた仕事ではなかったのではないでしょうか。

自然の中の一員である我々が、宇宙の循環をよくみきわめ生物が相互に共存共栄を保てるよう、その根元を知っていなければならないことでありましょう。

四年前にサラエボに行きオリンピックのスキー競技場になる山に案内されたとき、その途中の国有林の美しさにみせられたことがあります。ところがよく見ると樹木が密集しすぎ横倒れの枯木は苔むし、風や陽の通る透き間もないことに不信をいだき、たずねてみるとここは自然保護区域で何百年も手を入れてないのであると返答がありました。

だからこそ私が思うには、もっと植物が自身の生命力を発揮できるよう、人間が手助けをすることこそ、地球に生存するものの役目であろうと思うのです。

しかし外国と日本とはその見解の差こそ、多少あれども、その環境保全の意識は小さな子供のときからもって育っているようであります。日本の場合は人間にとって都合がよければ容赦なく切り捨てて行くことに危機を感じております。

我国には華道、つまりいけ花の道が古くから伝承されているが、この中には宇宙の循環の思想をふまえております。

つまり天を象徴する円と、地を象徴する正方形が融合したものは、宇宙のシンボルであり、天地和合して万物が生ずることを

さしています。

そして五行説とは、陰陽が和合して万物を構成しているという五つの元素、つまり木火土金水のことで目に見えない循環をしているということであります。

その第一は相克説で、「木は土に勝ち、金は木に、火は金に、水は火に、土は水に勝つ」第二は相生説で、「木は火を生じ、火は土を、土は金を、金は水を、水は土を生ずる」という陰陽道、五行の運行をいうのであります。

いけ花を考えるに、人はみな花を形よくいけることのみを思うのでありますが、これは第一義ではありません。

それ以前にある自然の摂理を植物を通して知り、五行の運行に従って我々は生活を構成しているのでありますから、花を学ぶことにより宇宙の仕組みを深く知らされて行くのであります。

花の道を追求することにより、一層自然界の恩恵をも知ることであります。

これに合わせて仁、義、礼、智、信という人のふみ行うべき五つの徳を五常とよび、いけ花は宇宙万物の象徴であり、同時に人間としての倫理をも象徴する教えを埋蔵しております。

とかく物質文明が先行することにより、人間が自然界の一員であることを忘れ、「自然界を我が所有物と考え違いをする」ことに始まるように思います。

環境保全のためにも花のみちをふまえ、その中から各人が共存する意義を謙虚な心で受けとめ、安心して住める地球でありたいと願う一人であります。（嵯峨御流華道家）

雨の砥石山から

今村　朋信

「雨天決行！」と叫んだばかりに、六月十四日(日)、雨の中を砥石山(八二六・七メートル)へ行って来ました。

四時、雨の音に目覚めて外を見ると、「雨の壁」と思わず呆れるほどの豪雨が鼻先の庭木さえおぼろにしているのではありませんか。続きに続いた雨無し日が嘘のよう。

「先生、行きますね。わたしは行きたいです」

朝、六時、バス停まで車で迎えに来てくれることになっていたK嬢からの電話。

「雨の日には雨の日の風情がありますよ。出かけましょう」

K嬢とは山のぼりの初心者を集めたカルチャーで知り合ったのです。わたしを先生と呼ぶのでちょっと戸惑っています。

続いてSさんからの電話。

「ほんとうに行くんですか」

「雨天決行って言ったろ」

敵わねえな、行きますよ、という感じではあったが参加表示。Mさんは登山好きだから来るだろう。

どしゃぶりの中を走って迎えの車は四十分遅れで到着。途中で拾うことになっていたもう一人のSさんに電話をすると、三十分待っていたのですが――、いま家に戻って来たところ、で不参加。

今回のメンバーは、山の楽しさは道にとらわれず登り歩くとよくわかります、と言ったことへの共鳴者の一団です。山ずれしていないので、なんにでも興味しんしん、感嘆する純な人たちです。こうした層の人たちが、これからの自然保護運動を支えて行くのでしょうね。少なくとも大切にする人たちになるでしょう。

はじめの計画は常次沢をつめて百松沢山へ登るのでしたが、こう雨が降っては沢水は増えているだろうし、ブッシュを漕いだらずぶぬれになりますよね。それで砥石山へ方向転換したのです。

札幌近郊の自然系歩道が整備されはじめたのは「緑化推進条例」が制定された昭和五十二年からとのこと。いまは三十本近くあるそうで、砥石山もその一つです。

川をのぞくと意外に水は濁らず増えてもおりません。雨も幸い小雨になって、歩道に入るころは木の葉の雫が音たてるばかり。空はこころなし明るくなったと思えるのだが、雲の中に入っているようで、視界は三十メートル前後。風が無いから傘さしての登山です。ウグイスが鳴いています。つるあじさい、またたび、おおはなうどの花がいま盛り。さんかよう、まいづるそうは早くも実を結んでいます。どうしてかごぜんたちばながひとつも見られません。えぞあじさいのつぼみはまだ固く、そうそう、でも、登山口のやなぎらんの花むら陰に二、三輪の飾り花が色づいていましたっけ。標高の差ではないでしょう、陽当たりの加減でしょうか。あまちゃづるでないかと手にしたのは、後で調べたらききょう科のばあそぶでした。じいそぶと呼ばれるつるりんどうとは会えずじまい。

長いこと登山をして来たわたしですが、登ることに無中で山を見ずでしたから、いまはまったくの初級生。山水の風景画のように樹間を流れる雲の中でさきほどから幾種類もの小鳥が啼いていますが、姿が見えなくては闇夜のトリ眼で、結局、雨の降っていたこともあり植物、野鳥の図鑑、スケッチブック一度も出さずじまいの山行でした。

歩道はよく手入れされ、落葉の積った感触がまたとてもよく、これがほんとうの山

道と一歩一歩踏みしめて歩いて来ました。これだけの雨が降りながら、山肌や道に一本の水の流れも見られなかったのは、この山に保水力があるということでしょうか。興味と疑問ばかりが先立つ山行で、会員のみなさんと一緒だったらな、と残念に思ったものです。計画的に休暇を作れないこのごろで、何もかもみなさんまかせ。多謝。ご健闘祈って止みません。

（N.T.T.札幌データ電信施設所）

トラバサミの危険性

平井　百合子

大半の金物屋では、「トラバサミ」を売っています。千円位の値段で、いつでも、どこでも、だれでも、お鍋を買うのと同じく、気軽に手に入れることができるのです。大きなトラバサミは禁止されています。したがってまわっているのは、ほとんどキツネ猟に使われるものと思って間違いないでしょう。長さ二十～二十五cm位、鉄製で仕組みは簡単、動物が触れるとバネの力で開かれていた歯が閉じて足や顔などをはさんで捕えるものです。キツネは鼻がとがっているのではさまれやすいのではないかと思います。近頃よく手首のところから切断されてビッコをひいているキツネを見ますが、それらは、トラバサミにかかったキツネが、自分で自分の足をくいちぎって逃げたものと聞いてます。いずれにしても他のいく種類ものワナの中で最も苦痛の多いワナではないでしょうか。ヨーロッパでは、その意味で、トラバサミを使用禁止にしているそうです。けれど残念ながら、我国の法律では使用できるワナの一つとされています。甲種狩猟免許をとれば良いことになっています（ワナの類は甲種、鉄砲は乙種、他に丙種あり）。日本では、どうせ殺すのだから、どんな殺し方をしてもかまわない、と考えてしまうのでしょうか？

道内では、五十六年度統計資料によると、甲種免許者は二二三名で（乙種は一六三五五名）、一市町村に約一名程度しかいません。ところがどうでしょう？金物屋にたくさん売っている、ということは、無免許で、違反でキツネを捕っている人がかなりいることの証明ではないでしょうか。事実、密猟の話は私も多々聞いています。キツネが年に一万頭も捕られているのは周知のことと思いますが、これは、狩猟免許者からの報告の数字だけで、捕獲の実数は未知数であります。あるハンターは、三倍位は捕っているだろうと言ってましたが、とにかく非常に多いことだけは確かです。

残念ながら、今の調子では、今後増々密猟は増えていくでしょう。毛皮をねらったものに加え、エキノコックス怖さに、不法行為であることすら知らずにトラバサミをかける、というケースが増えると思われます。このままでよいのでしょうか？密猟の監視体制は、非常におそまつです。サケに対しては厳しい警察もこちらの方にはさっぱりですし、鳥獣行政も同様です。トラバサミはキツネばかりとは限りません。他の動物ももちろんかかるわけです。早期にこれを使用禁止にすべきではないでしょうか。

トラバサミの危険性は他の面でも考えられます。こっそりトラバサミを仕掛け、運悪くエキノコックスを持ったキツネがかかった場合、キツネは極度に緊張し、糞をしてあばれ、そのためにエキノコックスの虫卵が、キツネの体や、ワナ本体や、そのあたりの地面に付着し、人間の感染につながるおそれがあるからです。多くの場合、捕獲した毛皮は業者に売り渡すので、危険は増大します。キツネの毛皮は鉄砲で捕ると穴があいてしまうので、トラバサミなどのワナを使った方が高く売れるのだそうです。エキノコックスの虫卵がついた毛皮が一般に売られているとすれば問題ですが、このような販売等について、お役所は野放しで、エキノコックス、エキノコックス、と騒ぐわりには無策なのだという気がせざるをえません。

以上、トラバサミに関しての問題をお伝えしましたが、やはりこういったものはなくしていくのが本当かと思います。皆様の中で、この事に関する情報をお持ちの方は、どうぞご連絡下さい。そして何とか良い方向へもっていきたいものです。できれば、自然保護協会も情報収集の場として、この問題解決に協力していただきたいと思います。

（キツネハウス）

フィンランドの少年から

中野　徹三

協会の昨年度の事業のひとつとして、まず小学生向きの『自然保護読本』（『自然とわたしたち』という題で、本年三月二十日に本協会から発行）が企画されたとき、編集委員会の席で、子どもたちの自然保護の活動ぶりを子どもたちの作文を通じてPRしよう、という話になりました。その結果、『自然とわたしたち』の「V・自然を大切にしよう」の中に、倶知安町立比羅夫小学校六年生の山下直美さんと、タンチョウの一斉調査に参加した浜中町立円朱別小学校六年生の木口朋子さんの二人の作文が収めら

れたのですが、この頃私は、出来たら外国の子どもの作文もこの読本に掲載されて、それを機会に自然保護をめぐって子どもたちの国際交流が始められたらすばらしいなあ、と考えました。それで、私の友人で今フィンランドのカルッキラ（ヘルシンキの北にある小都市）に、フィンランド人の奥さん（日本の高校にあたる学校の先生）と暮している篠原敏武氏に手紙を書いたところ、氏は奥さんのご協力を得て、マティアス・ヘルマン君が日本の子どもたちにあててわざわざ書いてくれた作文を訳して、私に送ってくれました。到着がやや遅くなったため、残念ながら読本に載せてもらうことは出来ませんでしたが、ここに協会誌に掲載して頂くことになった次第です。ヘルマン君は、この時九年生学校の七年生、日本式では中学一年生でした（今は八年生）が、自然保護の土台となる自然の観察を、フィンランドの小中学生がどのようにしているか、がわかると思います。北海道の小中学生の皆さんにとって、この手紙が北海道とよく似ているところのあるフィンランドの少年少女と自然保護について文通を始める機会になったら、と思っています。ヘルマン君に手紙を出したい方は、協会の中野あてお送り下さい。

（協会常務理事）

僕の、自然の中での趣味について

マティアス・ヘルマン

僕が自然の中での活動に刺激を受けたのは、四年ほど前の夏のことでした。その時、僕の友だちが、自然団体の主催する〝趣味のキャンプ〟から帰ってきました。友だちは、「蝶々を採集してきたよ」と、僕に語ってくれました。これを聞いて、僕も又、興味を覚えました。で、パパと一緒に、パパの昔使った蝶々の採集器具をさがしました。実は、僕のパパは、やっぱり若い時、友だちと一緒に蝶々の採集・調査をしたことがあるんです。

次の夏、僕も、〝自然キャンプ〟へ出かけました。それはもう、とっても楽しい経験でした。キャンプでは、だれも、自分の趣味にだけ没頭していたわけではなく、自然をいろんな角度から調査しました。ある日、みんなで、水をめぐる生活と水辺の植物を調査しました。そして、それをテーマにして、水を守ることの大切さについて語りあいました。次の日、こんどは、森を調査しました。キャンプで、僕は、自然からたくさん新しいことを学びました。このキャンプは、ほとんど南に位置する島に置かれ、ここから、たくさん、新しい種類の蝶々が採集できました。キャンプの楽しさは、けっしてこれだけでつきるものではありません。たくさんの新しい友だちと知りあい、今でもそのうちの多くの友だちとつながりをもっています。

それ以来、僕は、夏がくるたびにキャンプへ行っています。で、いつもなにか新しいものを学ぶんです。あと二年たつと、僕は十五歳を越します。そうすると、もうキャンプへは行けません。でも、指導者の助手になるよう務めます。そうすれば、キャンプに入れるでしょうから。

今、近所では、毎年、蝶々への興味が上がってきています。近所の十の市町村の友だちも蝶々を採集しています。で、僕たちは、蝶々クラブを作りました。夏になると、だいたい一週間に一度集って、情報交換をします。会議では、また、わなをしかけるための、共同のピクニックについて合意に達しました。ある友だちなんか、もう、携帯用発電器を買っています。その助けを借りれば、夜中でも強力な光を放つランプ、いいかえると、「光のわな」で、森の奥深くでも使えます。で、僕たちは、近辺の土地で、わなをしかけにでかけ、収獲は良好です。

一年前、ぼくたちは、蝶々の展覧会を開きました。会場は、蝶々クラブの会長の家のガレージでした。展示したのは、僕たちの採集品のなかの、最良のものと、そして、蝶々の採集のためのいろいろな器具です。たとえば、照明器具として、ルサという名の強力な「光のわな」（これで蝶々を集めます）を展示しました。ぼくらは、前もって、近所に、展示会の宣伝を広げておいたおかげで六十人近くの見物人がきてくれました。

精力的に採集をし、調査をしたので、この近隣から、科学的にも貴重な種類のものを発見しています。精力的に採集し、記録を作製し、蝶々を大切にあつかい、採集したものを整理しさえすれば、若い採集者であっても、科学的にはまれといえる発見も可能なんです。

自然とその保護は、現在の重要な事がらです。それを通じてこそ、興味ある趣味も可能になるのですから。

（七年生）

一九八五年一月